

2018年4月15日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「キリストの思い」

聖書:コリントの信徒への手紙一2:1~5

パウロは、《十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた》とある。ここに出てきた「知る」という意味は、知的に「知る」ことではなく、人格的に深く相手を知ることであることを意味している。聖書では、夫婦になることをそういう深さをもって「知る」とある。人格的に深く相手を知り、「豊かな時も貧しき時も、健やかなる時も病める時も、互いに愛し、敬い、共に生涯を送ることを約束しますか」という深さを持って相手を「知る」というわけである。ゆえに外側からの観察ではなくて、その内側に入り、相手と深く関わり合っていくことである。パウロの「キリスト以外、何も知るまい」とは、キリストのみを拝し、委ねて歩むこと。そのことの決心を表しているのである。

ただ私たちは、「キリスト以外、何も知るまい」と、そう決断できるものか？ このことの意味は、私たちの現実の社会において、キリストのみに頼って生きるということである。しかし私たちは、どちらかというと、此の世にも頼りながら、足りない所は神に補ってもらう生き方をしていないか？

パウロはどのような理解のもとに「キリスト以外、何も知るまい」と言っているのか？ 3節の「わたしは衰弱していて…」という所の「わたし」は、ギリシア語原文を見ると「カゴー」という言葉が使われている。カゴーとは、「私もまた」という意味。するとここは「私もまた、衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした」ということになる。西南神学部の青野太潮元教授は、このところの解釈に「私もまた、衰弱していて…」とは「私もまた、そうだった」という事になるという。「私もまた、そうだった」とは、私の他に誰がそうだったと言うのか？ それは、「キリストもまた、私と一緒に衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安を抱いた」ということである。

キリストの十字架には、神の「弱さ」が示されている。キリストはその「弱さ」を示されたがゆえに、「弱さ」を担う者の立場に身をおかれる。キリストの「弱さ」を担うゆえに、私たちの恐れ、不安、衰弱しきったその身体と共にあるということになる。パウロは、そうキリストの十字架を理解していたと思われる。そのことがどれほどの慰めであり、また希望が伴うことか。「キリストの思い」はそこにあることを覚る時、私たちもまた、慰め、励ましを受けるのではないか。(神谷)